

建物の再生による

生活と福祉の場づくり

大坪克也・月成かや・楠田るみ子
株式会社風土計画 福岡支部

当事務所の取り組みに福祉施設
の案件が多く、その為か既存
建物改修による施設づくりの相
談は多い。規模は自ずと小さく
なるが、事業者の思いとそれに
応える我々の熱量は決して小さ
くはない。新築会員らしい仕事
ではあるか、と同様の仕事数件
をまとめて報告したところ思い
がけず評価をいただき、奨励賞
を頂戴した。大変な光栄である。

そもそも営利を目的としない
事業体ばかりであるから資金力
は乏しい。主眼は活動の場づく
りにあるが、建物の再生利用に
おいて空間の安全確保や健康な
生活環境づくりに妥協は許され
ないし、建基法・消防法ほか基
本性能は必須だ。

ひと頃の構造計算書偽造やこ
れに類する不正が世間の知ると

ころとなり、社会の意識やモラ
ルの改革は進んだが、我々が相
手とする「既存」はその洗礼を
受けぬものも多い。

完了検査未受検、無確認の増
築、用途変更、不適切な改変、
場合によっては元よりそれを意
図したのであろう悪質なものと
見え受けられる。規模も法的条
件も家賃も全てOKという物件
に辿り着くことは容易ではない。

■レストラン「雨上がりの虹」

共同住宅の1階部分が改造の
対象となる場合は少なくないが、
本件でもこの問題に悩まされ、
多くの物件を対象に検討とプラ
ニングを重ねた。この間の事
業者の期待と落胆を見るのは辛
い。

提携する地元農家の野菜を



雨上がりの虹 内部

使ったフレッシュジュースをメ
インに据え、地域へのアピール
は重要課題であった。最終的に
得られた場所は広さこそ十分に
はなかったが、屋外スペースを
弾力的に活用して街並に参加し
ながら、新しい仕事の場を実現
することができた。

■A・B型作業所／「つばめ工房」

古い鉄骨造2階建ての事務
所ビルの改造である。従前のテ
ナントの居抜きをやり繰りしな
がらB型作業所の運営を続けて
いたが、飲食サービスのA型事
業を組み込むことを機に全面改
修となった。若干、建物の老朽
化が見られたため、構造のチェ
ックと補強を行いながら作業動
線の再編と新機能の組み込みを
計画した。新たに珈琲の店舗販



つばめ工房 内部

売、出張販売などの仕事も増え
て外部顧客との接触も増すため、
表の顔づくりとインテリアにも
配慮して福祉作業所のイメージ
改善に努めた。

■B型作業所／「まるまる屋」

二つの事業所の統合移転事業で
ある。移転先探しからの着手で
あったがこれも難航し、一年後
に漸く築30年鉄骨造3階建て
の旧併用住宅に辿り着いた。こ
こではてんかんや知的障がい
をもつ仲間が自立を目指して働く。
用途の変更に際しては建基
法・消防法からのさまざまな要



まるまる屋 SHOP 外観

求に合理的に対処して投資を抑えることができた。

1階店舗で販売する焼き菓子
は、福岡の都心で人気のオーガ
ニックショップに卸している事
もあり、それにふさわしい魅力
的なSHOPデザインを求めた。

■障がい福祉事業所「WELL」

古い木造2階建ての旧幼稚園
園舎を障がい者施設として再生
利用できないか、と生活介護と
就労支援の小規模多機能型事業
所を運営するNPO法人より相
談を受けた。

利用者の半数が知的障がいや
重複障がいをかかえ、車いす利
用者も多い。比較的稀な視覚障
がい者の為の仕事場づくりには
注意を要した。

木造の旧園舎には年月を經
て変形も見られたが、木の温も
りがあり、少々歪んだガラスや
塗り重ねたペンキの風合いが心
地よい。諸々の空間要求とも調
整しながら、幼稚園舎時代の印
象をなるべく残してゆくことに
配慮したためか往時を知る関係
者の喜ぶ姿を見ることができた。

■共同住居「はたけのいえ」

重度の障がいをもつ35〜2
7歳の男女4人が住む家である。
重度障がいの人たちがグループ
ホーム等で共同生活を送るケー
スはまだ稀である。在宅の彼ら
の暮らしは常に家族介護がベ
スで成り立つ。そのぶん家族の
負担は大きく、介護者である親
の高齢化と共に「親なき後」の
課題も顕在化する。

人員配置、ホームヘルパーの
自由契約が難しいことや施設整
備の諸条件を考え、公的補助の
対象となる「施設」を選択しな



WELL 旧園舎外廊下

かった。また増改築を重ねた建
物の構造が複雑、医療設備を含
む設備も多様で、計画段階より
大工と話しをしながら進めた。
このプロジェクトのポイント
は「地域の支援」とその「継続
のしくみづくり」にある。医療
や福祉関係以外の人たちともつ
ながりを作ろう、との呼びかけ
に地域の多くの人たちが応え、
やがて近隣の住人数人は世話人
として日中食事の支援に訪れる
ようになった。

4人の居室に囲まれた中央に
位置するLDKは、住人4人と
それぞれをサポートするヘルパ



はたけのいえ 生活の風景

、看護師、世話人と家族の団
らん場である。所属の異なる
ヘルパーや看護師たちの情報交
換の場となり、ケアの人材を育
てる場ともなっている。
重い障がいをもつ人が地域で
持続的に暮らすひとつの形、親
なき後への不安軽減へつながる
可能性を感じさせる。

再生から付加価値へ

建物再生利用の動機の多くは
弱い資金力にある。しかし得ら
れた環境、与えられた条件の中
でもがくうちに新たな期待が芽
生え、意識はいつしかストック
の「積極的利活用」へと向かう。
それが界限景観の保全や地域コ
ミュニティの刺激へとつながる
場合もある。

さらに、「場の確保」という初
期の素朴なニーズに対して、建
築が何らかの価値や魅力を添え
ることができたとすれば、新建
会員の仕事として胸を張ってよ
いのかも知れない。